



無国籍映画

著者	韓 燕麗
雑誌名	Econo forum 21 = エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	17
ページ	45-45
発行年	2011-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10236/7637

2010年
11月24日
水曜日

韓 燕麗 助教(映画史)

無国籍映画

私は、中国本土以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画について研究している。これらの映画は、映画の前に国名を冠するいかなるナショナル・シネマの枠組みにも収まらないもので、いわば無国籍映画である。たとえば一九三三年に、五歳の時に渡米した中国系移民のジョセフ・チョウという人が、サンフランシスコのチャイナタウンでGrandview Film Companyという映画会社を設立させた。以後一九四八年ごろまで、三十数本の中国語映画がアメリカの地で移民たちによって製作された。これらの〈中国映画〉とは呼ばれない(中国語映画)について、私が調べている。

今日、国籍を指標として映画を分類し批評することが、映画研究の主流であろう。ヨーロッパ近代が作り出した国民国家というフィクション

を映画に当てはめ、特にアジア映画に関する先行研究の中では、映画をその国の「国民文化」について「勉強する」ための良き教材とみなすものが多く見られる。

しかし、個々の国を単位とする映画研究のアプローチでは、もはや把握しきれない映画史の問題が存在している。トッキー映画が中国国内で大きな人気を博した三十年代初頭から、アメリカや東南アジアなど中国大陸以外の場所においても、中国系の移民たちが自らの母国語を使って異境の地で映画を作り始めていた。海外で製作されたこれらの中国語映画は、ただ単に中国系移民の郷愁を癒すエンターテイメントだけではなく、移民たちの映画はコミュニティのなかに存在していたさまざまなエスニック共同体を均質化させてしまうと同時に、観客を感情的に結

束させる力も持っていた。さらに、国際情勢や移住先の国の移民政策の変動により、中国系移民の帰属意識も絶えず変化していたのである。

映画のテクストを通じて、移民のアイデンティティが変容する過程を探ってきたが、その考察は、海外で暮らしている私自身にとっての内省の旅でもあった。中国で生まれ育ち、中国語による教育を受けた漢民族の中国人である私は、もしも日本で暮らす機会を得られずにと中国本土で生活を送っていたら、「中国文化・中国語・中国国籍」の三位一体の構造が一致した「中国人マジョリティ」として、その保護下のない中国系移民の現実を想像することすらできないまま、一生を終えることになっただろう。中国と日本のあいだを「越境」することによって、自らが「中国人」だと名乗る意味を

再考する機会が与えられたのである。

グローバル化が進行し、お金・情報国境を越えてますます流動化しつつあるなかで、私自身のように、複数の文化や社会の境界に生きなければならぬ人間はますます増えることであろう。移動の時代に生を受けたわれわれは、中央集権的な国民的アイデンティティへの同化に埋没されない「個」としての生き方を模索する機会をついに手に入れた。半世紀前における中国系移民のアイデンティティが構築されていったポリテクスは、「国民」としての自己同一性を超えたあり方を模索する現代のわれわれに、新たなアイデンティティを把握するための座標軸を提供してくれているのである。